

# 今日の黙想のてびき

週日聖書日課 ルカによる福音書 23：44～56a  
2025年3月15日(土)

## ◆文脈と言葉

—主イエスの死と墓への埋葬の場面です。レントに読むのにふさわしい箇所の一つです。

## ◆黙想のすじみち

### (1) あらすじと説き明かし

—「イエスの死」：この段落は三つに分かれます。死に先立つ異常現象、死、そこにいた人々の反応です。

—暗さは悪の力のあらわれです。「闇が力を振るっている」(22:53)。神の子が死のうとしていた人間の罪の頂点のまさにこの時は悪の力が頭をもたげる時なのです。そして、主イエス復活は、この暗闇をけちらすのです。また、聖書は神のご計画が実現するとき、自然も含めた全被造物が関わることを証言しています(例 終わりの日のしるし 11:25-28)。神殿の垂れ幕が裂け、今や神と人との間を隔てるものはありません。

—ここには神に見捨てられたとの言葉はありません。大声で叫ばれたのは父なる神への信頼です。「父よ、わたしの霊を御手にゆだねます」(詩編 31:6)。ルカによる福音書は主イエスの死が神への信頼のうちにあることを語ります。

—この福音書は、百人隊長の証言を「賛美」と記します。十字架の片棒を担いだはずの群衆たちも「胸を打ち」ます。十字架に死においてすでに光が差し込み始めているのです。そして、弟子の婦人たちは遠くですが、これらの出来事を見ていました。確かに死を確認し、その後復活の証人となるのです。

—「墓に葬られる」：主イエスの死は、人間の目には犯罪人の処刑でしたが、その扱いによって尊敬をもって扱われたことがわかります。一つは、ヨセフというユダヤ最高法院の議員によってひきとられたことです。ヨセフは議員でしたが、議会の主イエスの死刑には反対し、「神の国を待ち望」む信仰をもっていました。形式上最高の集団によって、けれどもその中にあらわれる信仰によって葬られたのです。

また、納められた墓は、共同墓地ではなく新しい墓でした。神にはいつも一番のものが備えられるのです。

ガリラヤの女性たちは、主イエスの遺体を確認、家に帰って埋葬のための備えをします。安息日が終わり次第丁寧な埋葬の準備をしようとする主イエスへの敬意をもった仕える姿があらわれています。